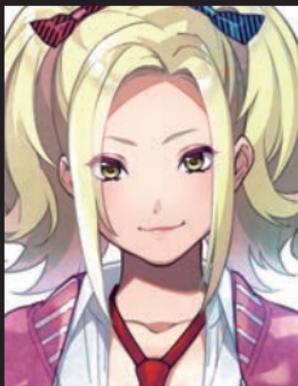


DEAD DAYS

— first day —



DEAD DAYS - first day - CHARACTERS



三峯 あいら

(みつみね・ー)

CV：青葉みづき

照の仲間となる“死者”の一人。友情に篤い男前ギャル。コミュ力は高いが語彙力は低い。



安宅 真魚

(あたか・まお)

CV：相模恋

曲がったことを許さず、それを声にすることを恐れない凛とした少女。照の幼馴染だが犬猿の仲。



暮坂 照

(くれさか・てる)

CV：柊唯也

本作の主人公。見た目は爽やかな雰囲気イケメンだが、地の性格は狡猾な嘘吐きでエゴイスト。

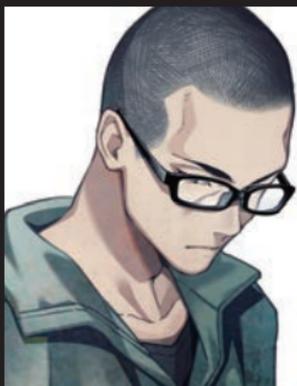


犬童 瑛太

(いんどう・えいた)

CV：綾野綾斗

照の学校の先輩。不良グループの顔役であり、教師からも一目置かれる存在。



天願 壮吉

(てんがん・そうきち)

CV：野☆球

照の仲間となる“死者”の一人。寡黙で落ち着いた性格。記憶喪失だという謎の男。



布良 麻奈美

(めら・まなみ)

CV：手塚りょうこ

照の仲間となる“死者”の一人。温かな子持ち主婦。争いごとが嫌いで身持ちが固い。

一 目 目



.....
.....えーと。

あれ？

んん？

「お、こいつ目が覚めるっばい」

「最後の一人ね……」

頭の芯がしびれて、ふわふわしている。その中で人の話し声が聞こえていた。

……えーと。俺、何してたんだっけ？

やべえ。全っ然思い出せねー。寝起きだからか

……？

とりあえず、目を開けてみると……

すぐそこに若い女がいた。俺と同じぐらいの年齢かな。見た感じ凄くギャルっばい。

もう一人、こっちも女だ。見た感じ20代前半のお姉さん。おっぱいデツケエ……

二人とも視線は俺に釘づけ。そんなにガン見され

たら照れるっちゅーの。

「つかここはどこだ？　電車の中で居眠りでもしちまったかと思っただけど、どうもそうじゃないっぽい。」

狭くて暗い。たぶん、貨物用のコンテナ……の中なのか？

嫌な予感が、じわっと胸の中に広がる。なんて俺、こんなところに……？

「もう一人……？」

そして、奥のほうにも誰かがいる気配。つまりこのコンテナの中には、俺を含めて4人がいるってことか。

今度は女じゃなかった。年齢不詳って感じの危なそうな野郎。目つき悪いな。なんとなく犯罪者っぽい。

「そいつにも訊いてみたらどうだ？」

「うん」

後ろの奴が言うのと、ギャルっぽいのがうなずいた。

「あのさー」

そして俺に話しかけてきた。

「ウチらって、なんでここにいんの？」

「……え？　さあ？」

いやいや、いきなりそんなこと言われても困るわ。俺はともかく、他の奴らのことなんて知らねーよ。

ん？ 俺はともかく……？

あれ？ 俺ってなんでここにいるんだっけ？

「やっぱり、この子も知らないのね。……ねえ」

「は、はい」

年上っぽい巨乳美人が身を乗り出してきた。視線はつい首から下に向いてしまう。

「君も、今日どこかで大怪我したりとか……その、たとえば死んだりとか、した？」

もみてー。超もみてー。いろんなもん挟みてー。

……って。

「は？ 今なんてったの？」

いけね。つい欲望全開でいらんこと考えてたから、よく聞こえなかった。

「だから、マジでボケるなし。おまえ死んだっしょ？ 今日、どっかで」

ギャルっぽいのが苛立った感じで突っかかってくる。しかも、わけわかんねーこと言ってるし。

「死んだあ？」

「死んだあ？」

今そう言ったよな、確かに。

こいつ……頭大丈夫か？

死んだって、じゃあ今ここにいる俺はなんなんだよ。

そんなわけが……

階段を踏み外したときみたいに、ぞつとする寒気が股間からぶわつと吹き上がってくる。

「え……？」

あれ……？

俺……確か……

「思い出したか……」

頭のしびれがクリアになっていく。記憶が一気にあふれ出してきた。

えーと……

俺は、今日……

* * *

3時限目が終わった休み時間だった。

俺はいつものようにダチと駄弁っていた。

昼飯どこで食うとか、ユーチューバーのチャンネル動画のこととか、そんな空気みたいな軽い話題だ。

場の主役は俺じゃない。主役はダチのほうだ。サッカー部のエースで身長185センチの小顔イケメン。

他愛ない話に興じながら、クラス中のわたちの視線をビシビシ感じる。

女だけじゃなく、男の視線も時たまある。そっちは俺に対する羨望だ。

問答無用でかつこいいヒーローの隣を約束された親友ポジション。それがこの俺だから。

マンガとかアニメでよくいるじゃん？ 主人公といつも一緒にいる、ちよい三枚目で気のいいヤツ。

ああいうキャラって好感度高いよな。で、俺が目指してるのもそこ。

でもさ。ああいうヤツがもし、主人公の陰に隠れてその人気を利用しまくる腹黒タイプだったとしたらどうする？

まあ、要するに俺のことなんだけど。

サッカー部のコイツは、まあぶっちゃけスゲーモテる。狙ってるわたちにとっちゃ、異常に競争率が高い物件なわけだ。

そこで出番になるのが親友の俺。コイツへのパスポートを求めてわたちが寄ってくるのを、油断させておいてパツクリと食う。

その後で実際に紹介してやることはしてやるし、だいたいはおとなしく引き下がる。そんなこと誰にも知られたくないもんな。特に本命のコイツには。

たまに事を荒立てようとする女もいるけど、そういうときは隠し撮っておいた記念写真が物を言うよ。

罪悪感？　ないねまったく。万事は世渡り。人間関係ってのは互いに利用し合うってことだろ？

コイツだって、どいつだって、それは誰もが同じこと。程度の差こそあれ、お互い様ってやつだ。上手くやれないほうが馬鹿を見る。

だから——

「照、ちよつと」

俺はこいつが、たまらなく大嫌いでしょうがない。

話しかけてきたのは安宅真魚あたくままおだった。小学校以来の腐れ縁の女。世間ではそういうのを幼なじみと言うらしい。

「話があるんだけど。いい？」

目配せで、他人にははばかれる話題だと告げている。俺は親友ちんゆうに断りを入れ、真魚と一緒に廊下へ出た。

「なんだよ？　別におまえと話すことなんてねーんだけど」

「B組の藤野さんのこと。なんでラインとか電話に出てあげないの?」

じろりと下から睨んでくる。ああそういうことかと話を理解し、うんざりする。

例の、サッカー部のアイツ狙いで俺にすり寄ってきた女の一人だ。

俺とも寝たけど、その後は本命のアイツに流した。そっちと今どうなっているのかは知らな

い。

「関係ねーだろ?」

それに、真魚こいっとは1ミリも関係のない話だ。そのことで何か言われるような筋合いはまったくない。

「あるよ。相談されたし……照と今、付き合ってるんでしょ?」

「は? 付き合ってるねーし。あいつは徳山のことが好きなんだよ。俺は紹介してやっただけだつて」

徳山というのはサッカー部のアイツのこと。最初からお互いそのつもりで利用し合っただけの仲だ。

「違うよ。藤野さんは、照のことが好きだって言ってた」

は? なんだそれ。意味わかんねーし。

「はあ……」

真魚は呆れたようなため息をついた。

「あんたって、自分で頭いいと思ってる割に鈍感なところあるよね。あの子は最初から照がよかったんだよ。徳山くんのは、あんたに近づく口実に使っただけ」

……なんだそりゃ？

徳山と比べてなんで俺を好きになったりするんだ？　そこに何のメリットも感じないし、理解できない。

まあ身だしなみには気を使ってるし多少は見た目イケてる自信あるけど、背は170センチあるかないかで運動部で活躍したりもしていない。

成績だつてクラスのトップつてわけでもないし、天才的なギャグセンスだつて持ち合わせてない。それっぽく頭が回って面白そうなヤツに見せてるだけだ。

それが俺、暮坂照の等身大。まあ自分で言うのもなんだけどき。

そんな俺と付き合つたつて誰かに自慢できるわけでもないし、何も恩恵はないと思うんだが。「意味わかんねーけど、そうなのか。でもやっぱり俺には関係ないじゃん」

「最低」

吐き捨てるような言葉。慣れっただけど、とつくの昔に忘れたような感情が胸の中でじくじくと刺激されるのを感じる。

真魚と話すといつもそんな感じになつてしまふ。意味もわからず、なぜか後ろめたい気持ちを意識させられる。

わざわざ石をひっくり返して、じめじめした裏側でくつろいでたダンゴムシを日光浴させようとするガキっているよな？ こいつのやることっていつもそんな感じ。

だから俺は、こいつの正義漢気取りが大嫌いで近づきたくないんだ。俺にとって、天敵のような奴と言ってもいいかもしれない。

「だって……その、もう付き合ってるカップルみたいなこと……したんでしょ？ 藤野さんと……」

なんかモゴモゴ言ってる。照れるぐらいなら言うんじゃないよ。

「だから？」

真魚「だからって、あんたねえ……だったら付き合ってあげなさいよ！」

「おま……セックスしたから付き合うって、短絡しすぎだろ。明治時代かよ」
いや、明治時代どうだったのかは知らんけど。

「わかってたけど最低すぎ。ヤリチン野郎！ クズ！」

「はい変顔ゲツト〜」

目をまん丸にして大口開けた怒り顔を、一瞬の早業で撮影する。なかなか笑える一枚が撮れた。

「ちよっ、なに撮ってるの！ 消して！ 消しなさいよ！」

「消してほしけりゃ一万円な」

顔を真っ赤にしてスマホに手を伸ばしてくるのを、あしらって逃げる。

仕返しにはちょうどいい嫌がらせに成功した。ざまーみやがれ。

いつもこの調子で俺の素行に口を挟んでくる、こいつが心の底からうつつうしい。近所の世話焼きおばちゃんかよ。

「あ、暮坂あ。さつき3年の先輩が呼んでたぜ。屋上にいるって」

「瑛太先輩が？」

教室に戻る途中で声をかけられる。俺はそのまま階段を上り屋上へ向かった。

* * *

犬童瑛太。
いんどうえいた

3年の先輩だが、バイクの事故で長期入院した影響で一年ダブリ。なので俺とは2コ違くなる。

喧嘩の腕つぶしは伝説的だ。五人六人に囲まれて返り討ちにしたとか、誰それっていう格闘家をタイムンでのしたとか、そっち方面ではかなり有名らしい。

おまけに噂じゃ死んだ父親はヤクザの組長だったとか。うちの学校で一番の強面だ。
こわもて

聞くところによると拳がめちゃくちゃ硬いらしい。コンクリートで殴られたみたいにお効くん

だとか。
で。

俺は今日、その伝説を身をもって体感することになった。

感想はコンクリートっていうか、鉄？ いきなり鼻が折れたかと思ったし、一発で足腰から力が抜けた。鼻血と涙が止まらない。

顔を見るなり、めっちゃいい笑顔で「よお」と笑いかけながらいきなりの一発。完璧なタイミングだ。喧嘩慣れっつのはこういうことだつて、よくわかった。

「なあテル。俺、おまえのポケモンなんだつて？」

声だけはにこやかに、容赦なく脇の下に爪先蹴り。

ナイフで刺されたかと思った。痛すぎて息がつかまる。咳き込みながら、口に流れ込んだ鼻血と涎を必死に吐き出す。

「……勘弁、してください」

演技するまでもなく、これ以上なく悲惨な声をしぼり出して許しを乞う。

そこでようやく俺自身の状況が理解できた。かなりヤバい状況だつてことが。

「言うねえ、おまえ。すげえなー。まさかそんな度胸のある奴だとは思ってなかったぜ」

俺は結構、女がらみて恨みを買うことがある。徳山にやり捨てされた女が俺を逆恨みして、荒っぽい男友達をけしかけてくるパターンだ。

見た目を裏切らず、腕つぶしには全然自信がない。そんな俺が非常時に頼れる暴力装置として、瑛太先輩を頼りにしていたのはまあ事実だ。

知り合ったきっかけは、ほんのつまらないことだった。先輩が便所で吸った煙草の火元が原因で、ちょっとしたボヤ騒ぎが起きた。

俺はそれを目撃していたが、教師の追及に対して白を切り通した。

真魚みたいなつまらない正義感を出して、危険人物の恨みを買うのは何の得もない。ただそれだけの理由。

しかし、先輩はその借りを忘れていなかった。

女関係でもめてヤバくなった俺を助けてくれたのだ。たまたま俺がボコられるという話を耳にしたのことにらしい。

その幸運を利用しない手はなかった。

俺のバックには瑛太先輩が常に控えているという嘘を、あちこちで吹きまくった。ポケモン発言は、それに尾ひれがくつついたものだ。

「すんません、すんません……ッ」

壊れた蛇口みたく鼻血をたれ流しながら、俺は這いつくばって泣きを入れた。瑛太先輩の笑顔は消えない。

「勘違いすんなよ。俺はおまえの度胸を褒めてるんだぜ？ この俺をポケモン扱いしようだな

んで、ただのヤリチンクス風情が考えるようなこっちゃねえ。そうだろ、テル。な？」

上機嫌で優しげな声が、逆に死ぬほど恐ろしい。笑いながら人を殺せるタイプだ。小便を漏らしそうだった。

「調子に乗りましたッ！ 許してください……ッ」

「だめだな」

笑ったままで絶望的な一言。

「罰金。百万。明日までに持ってこい」

「ひやく……ッ」

むちゃくちゃだ。俺をいたぶり、追い込みをかけるためだけに吹っかけてきてる要求だっ
のはわかる。

だつてまさか、いくらこの人でもただの学生に百万なんて用意できるとは本気で思っ
てない
だろう。

「言っとくが、これ冗談じゃないからな？」

しかし、そのまさかを感じさせる声で詰めてくる。どうしたら穩便に済むかを必死で考
える
が、妙案なんか浮かばない。

「金持ちのホモ親父連中を紹介してやるよ。一人10万取れば10人で済むぜ。明日
まで
におまえ
のケツがどうなってるかは知らねーけどな」

俺はたまらずガキみたいに泣き出してしまった。恥も外聞もプライドもない。

「冗談だよ、冗談。俺がかわいい後輩をそんな目に遭わせるわけないだろ？」

笑いながら肩を叩いてくる。よかった。この先輩にも人の心があつて……

「だからさ、今日の夜ヤクザの賭場襲ってこいよ。百万なんて楽勝だぜ」

なんかもう頭の中が真っ白になって、何も考えられなくなる。ヤクザの賭場？ 襲う？

理解不能の恐怖で身体が震えていた。この人が次の瞬間に何を言いだすのか、何をするのか、一切想像できない。まるで宇宙人だ。

「ほら、これ使えよ」

そして、いきなり目の前に突き出されたのは拳銃だった。普通にズボンのケツに差してたらしい。マジで何考えてんだよ、この人……？

「何ビビってんだよ。モデルガンに決まってるんだろ。まあ後は、自慢の度胸ひとつで上手くやるんだな」

「……マジに言ってます？」

「うん。マジ」

だから、その笑顔怖すぎだつて……

「じゃあ、今日の放課後な。逃げんなよ？」

4時限目のチャイムが鳴った。瑛太先輩は去っていく。

マジで逃げたかった。いっそ教師に泣きつくかとも思った。しかし、それで済むわけないのはわかってる。

あの悪魔みたいな先輩相手にバックれたら、ここでの学園生活自体がもう終わりだ。そんなことはとてもできない。俺は今日まで上手くやってきたんだ。

昼休みも食欲はなく、死んだように俺は放課後までの時間を過ごした……

* * *

そして、俺は失敗した。

瑛太先輩が俺に渡した銃はモデルガンじゃなく本物で、パニックになった俺は気が付くとヤクザの事務所に連れ込まれていた。

アウトレイジに出てきそうなイカつい顔面のスーツの男と、ジャージ姿の若い男に挟まれ、詫びとして要求されたのは、女を身代わりに呼び出すこと。

それならいくらでもあてがある。サッカー部のイケメン目当てに集まってきたどうでもいい女ども。こんなときにこそ、役に立つてもらってもいいだろ。

そう考えた俺の目の前に差し出されたスマホには、今日休み時間に撮った真魚のアホ面が表示されていた。

「ほれ、かけるよ。上手くやれなかったら秩父の山の中に埋めるからな」

若いほうのヤクザからスマホを渡された。俺は緊張と疲労に震える指で、真魚のアドレスを表示させる。

そして……液晶に浮かぶ通話アイコンをタップした。

「……照？」

電波の向こうから真魚の声が聞こえた。スピーカーホンになっているので、ヤクザたちにも聞こえている。

昼間に聞いたばかりの声だっていうのに、なんだか物凄く久しぶりに感じる。

それはきつと、俺が今いるのがあいつのいる場所とは確実に違うという感覚からなんだろう。

俺は今、非日常という魔界にいる。ゲームや映画の中にしかないと思っていた、一回しくじれば死にまうような危ない場所に。

「なんなの？ 電話かけてくるなんて珍しいじゃん」

「お、おう……」

ヤクザたちの視線と重圧で息が苦しい。その中で俺は、必死に頭を動かそうとする。

「あのさ……今から会えね？」

一瞬、沈黙があった。

「は？」

「あ、嫌だった？」

「あ、ううん。別に嫌とかじゃないけど。明日学校で会うのに、なんてだろと思って」

「えっとさ……新宿に出てくれる？」

「……………」

「徳山とかと、今知り合いの誕生パーティーやってさ……徳山がおまえのこと呼べってうるせーから。他にもイケメンたくさん来てるぜ？ 来いよ」

何のためらいもなく、嘘で塗り固めたさらなる嘘が口から出ていく。

「……………」

「あ、ちゃんと女の子もいつから大丈夫。昼間、おまえ撮った変顔写真な。あれみんなに大ウケ。かわいいから会いたいってさ」

そう、これが俺の本質。誰かを騙して利用するのに、心なんか痛みやしない。

誰でも少しはやってることだろ？ 俺はただ他人より自覚的ただけさ。

「……今日、3年の怖い先輩に呼び出されてたね」

黙って俺の話を聞いていた真魚が、落ち着いた声でそう言った。

「教室に帰ってきたら、顔腫らしてたし」

「その話、いま関係ねーだろ……」

「ううん。たぶん、その話と関係あるんでしょ。脅されて電話かけてるんじゃない?」

真魚の声は静かだ。こいつ、なんてそこまでお見通しなんだよ……?

「なに言ってる……そんなんじゃないよ」

「照。あんたって、自分で思ってるほど嘘が上手くないよ。今だって声、ちょっと震えてるし」

俺は言葉を失った。なぜか、ほっとしたような気持ちを覚えているのが奇妙だった。

俺の嘘はこいつに通じなかった。こいつはいつだって正しくて、俺の汚いところを暴いてし

まう天敵だから。

あまりにも遠く離れてしまった場所同士で、その事実だけがあまりにも昔から変わらない。

だから、なのか? ほっとしたのは。

俺は失敗した。真魚を騙せなかった。俺を待っているのは絶望しかない。

「でも行くよ。新宿のどこなのか?」

だからこそ、聞こえてきた次の言葉は信じがたいものだった。

「私が行かないと、照が何かやばいことになるんでしょ。だったら、行くから」

……何を言ってるんだ、こいつ?

嘘ってわかってるんだろ? やばいって知ってるんだろ?

なのになんで、わざわざ来ようとするんだよ?

それってまさか、おまえ……

俺を助けるために？

「……ッ」

そう思ったとき、胸の奥からこみ上げてきたのは——
助かったという安堵ではなく。

思い通りに運んだという喜びでもなく。

まして、真魚に対する感謝なんかじゃ微塵もない。

「ふざけんよ、馬鹿野郎……」

それは、火傷するような怒り。ただそれだけだった。

たとえ地獄に突き落とされるとしても、世界中でこいつにだけは手を差し伸べられたくはない。

よりもよってそんな相手から、俺は情けをかけられようとしているのだ。

そのことに対する激しい憤りと憎悪は、俺の感情のすべてを支配した。そう、頭のとっぺんから爪先まで全部を。

「照……?」

「バーカ！ バーカ！ バーカッ！」

ありったけの悪意を舌に乗せて、俺はスピーカーに真魚への罵倒をぶちまけた。
「まんまと騙されやがってバーカ！ 全部俺の嘘だっつーの！」

「ちよ、照……!?!」

「なんでもねーよ馬鹿野郎!」

叩きつけるように通話を切った。

重い沈黙だけが後に残った。息を荒げた俺の呼吸だけが、その中で繰り返し響いている。

「……なにやっつてんだ、おまえ?」

何が起こったのかわからないというように、ヤクザが俺の顔を見る。

「今、明らかに上手くいきそうだったよな? まあいいや、もっかい掛け直せ」

黙って首を横に振った。

拳が鼻にめり込んだ。

「ブツ……」

噴水みたいに鼻血が飛び散る。

あーあ、高そうな絨毯が汚れちゃった……なんて考えてる場合じゃないはずだけど、人間の心理って不思議。

「掛け直させて。次はこいつでいくぞ」

表情を変えないまま、ヤクザがテーブルに置かれたクリスタルグラスの灰皿を手を取った。ずっしりと重そう。

「嫌だ……」

脳天に隕石が落ちてきたみたいだった。

身体がぐにやぐにやになって、床に転がる。やべえ、全然動けない。

頭には痛みを感じない。刺激が神経の感じるキャパをオーバーしてる。ただひたすら熱いだけ。あと、なんか出てるっていうか漏れてる。

「あーあー。頭パッキリ割れちゃってかわいそうに。な、無駄に根性出すなよ。そういうアレじゃないんだろ？ おまえはさ」

心から同情してるかのように、ヤクザが俺を諭してくる。

言われなくてもわかってるんだよ、俺自身の性根ぐらいは。

今よりずっとガキの頃に、あいつと……真魚と決裂した、あの瞬間からずっとな。

「うるせえ……」

もつれる舌を必死に動かす。どうして？ わからない。ただ、そうしなければいられなかった。

決してあいつをかばう愛情なんかじゃない。むしろその逆だ。

俺はあいつを、あいつの正しさを、この世の誰より嫌いで憎んでいるから。

世界中の全員に土下座して命乞いをしたとしても、あいつにだけは中指を立ててやる。たとえあいつが世界の支配者になったとしてもだ。

それが俺の……クズとしての、たった一つの意地だから。

「……俺はなあ！」

「うるせーのはてめえだろ」

——あ、死んだ。

そう確信できるほどの衝撃が側頭部から走り抜け、体中の神経を津波みたいに壊滅させていくのを感じる。

ゆっくりと何もかもが冷えて、何も見えなくなっていく。

「殺っちまったなあ。目玉も脳みそも半分飛び出して、こりゃもう助からんわな」

「すいません。なんか舐めてる感があったもんで、つい勢いで」

「まあしょうがねえよ。そう感じたときに殺れるか殺れないかだからな、この稼業は。ヤクザ的におめーが正しい」

「とりあえず、瑛太くんに連絡入れときます」

誰かの声が、世界が俺から遠ざかっていく。

これが、死ってやつなのか……？

なんか静かで……寂しいもんなんだな。

ああ、俺……

どこで失敗したのかなァ……

* * *

「うおわああああああアアアアアアアッ!?」

「パニック起こした！ 押さえつけてッ」

「またこのパターンかよ！ あたし2回目だしッ」

「それを言ったら俺は3回目だッ……一番最初に目が覚めたからな！」

三人がかりで押さえつけられた俺は、恐怖と混乱と憤怒を意味不明の絶叫に換えて吐き出しまくった。

やがて、すべての感情が俺の中から流れ出ていった。それとともに、筋肉から暴れる力も抜けていく。

「……なんだよ。なんなんだよ、これ？」

心臓はまだバクバクいってる。なんだ？ マジでどういことだ？

あの暴力団事務所では俺は殺されかけたけど、実は助かった……ってことなんだろうな。だって今、現実に生きてるんだもん。

こいつら口々に死んだとか言ってるけど、明らかに傷ひとつなくて健康そうだし。

自分の頭に触れてみる。

あのクリスタルの灰皿でカチ割られた頭蓋骨は、何事もなくびったりとくっついている。血

も出ていない。不可解といえはまずそこだ。

「つか……ここどこ？」

「こっちが知りたいしー」

諦めまじりのため息をギャルっぽいのがつく。

改めて、コンテナの中にいる3人をじっくり観察してみた。そうしていると精神が少し冷静さを取り戻してくる。

こいつらの持っている情報は、俺と大差ない……というかまったく同じみたいだ。

自分がどうしてこうなったのか、状況を把握できていない。その点において情報格差はない。そこは安心してできるポイントだ。

もっとも、そう見せかけてのブラフということもありうるが……このギャルと年上おっばいはまあ、たぶん見たままな奴だろう。

怪しいのは、あの眼鏡かけた坊主頭のアイツだ。

見るからに胡散臭く、目つきからしてまともな仕事に就いている人間には見えない。街を歩いたら高確率で警官の職質を食らうだろう。

「こんな状況だけど、てゆうかこんな状況だからこそつていうかき。自己紹介とかしとかな
い？」

俺はフレンドリーな口調と表情を作り、にこやかにそう切り出した。

まずは情報を集めることからだ。この場にいるこいつらが何者か。当座、知ることができるのはそれぐらいなものだろう。

「それ賛成。アリ寄りのアリで」

読みどおり、コミュ力の高そうなギャルがまず賛同してきた。

「私も、別に構わないかな……」

この巨乳は、少し流されやすい性格っぽい感じがする。いざというとき利用するならこいつかな。

「あんたは？」

女二人を味方につけた俺は、危なそうな野郎を牽制してみる。

「……文句はない」

坊主頭は無愛想に答えた。よし、とりあえず場のイニシアチブは俺が握ったな。

「じゃ、そこから時計回りで」

「は？ そこは言い出しっぺからじゃなくね？」

「ま、そーか。そりゃそうだな」

チツ……バカそうなギャルのくせに抜け目ねー奴だな。まあいいや。

「俺、暮坂照。フツーに学生。えーとなんつうか……今日タチ悪い先輩の追い込み食らって、ヤクザ関係のトラブルに巻き込まれてさ」

偽名とかは使わず、身の上起きた事情もそのまま隠さず説明した。

今やってるのは、池に石を投げ込んで深さやら棲んでる魚やらを知る作業だ。より詳しく状況を見極めるには、投げ込む情報も正確なほうがいい。

「新宿の暴力団事務所で、ぶっ殺された……と思ったら、いつの間にかここにいたって感じ。以上、かな」

なんか自分で言ってる思ったけど、ちょっとアニメとかのあれっぽいな。トラックにはねられたらファンタジーの世界にいたってやつ。

確かああいうのだと、後々いいことが待ってるんだよな。超能力使えるようになったりとか、お姫様が出てきたりとか。

でもなんか今、全然そういう明るい未来を感じないんだけど……

「じゃ、次あたし。名前、三峯あいら。同じく学生」

「走ってる車から落ちて死んだ。つか、殺されたし。今マジで意味不明」

なんか語彙少ねーな。まあ、だいたいわかったけど。俺と似たような感じか。

「次は、私かな……布良麻奈美といいます。通勤途中で、降りる駅の下り階段がいつも凄いらッシュになるの……それで今日、事故が起きたんです。大勢の人が将棋倒しになって」

「じゃあ、その事故で……？」

「死んだとは思わないけど、下敷きになって救急車で搬送されるところまでは憶えています」

自分は死んでない派もいるのか。よかった、少し安心した。

「じゃあ、最後はあんただ」

危なそうな野郎を見て切り出す。

「名前は……わからん」

「は？」

「どうやら記憶を失っているらしいんでな。死んだ拍子にそうなったのか、元々なのかもわからねえんだ」

「ふざけんよオッサン。そんな嘘が通ると思ってるのか？」

やっぱり曲者はこいつだった。記憶喪失だと？ そんな都合のいい話があつてたまるかよ。

「いや、誓って嘘じゃねえ。信じてもらうしかないけどな……」

坊主頭の男は、しきりに手で喉元をさすっている。

「だが、死因だけならわかってる……たぶん首吊りだ。ロープが首に喰い込む感触と、死んでいくときの絶望感。それだけは嫌ってほど意識にこびりついているんだ……」

生々しい話だな。自殺？ それとも絞め殺された？

「やめて！」

反射的に巨乳——麻奈美が叫んだ。

「死んだとは限らないでしょ……」

「俺も、麻奈美さんと同意見かな」

俺は麻奈美の肩を持つことにした。希望的観測は持っていたいし、これから派閥を作る上でも有効だ。

「確かに、みんな死ぬような思いをしたってのは共通してるよね。でも、生きてるじゃん今。それはどう説明すんの？」

「それ、言ってるかも」

ギャル——あいらも同意した。ノリでうなずいてるだけかもしれないが。

とりあえず次は、コンテナの外がどうなっているのかを知りたい。

他の奴らも気持ちとは同じだろう。最後の俺が情報を持っているかと思っただからこそ、あえて外には出ずに目覚めを待っていたんだろうし。

そのとき、ポケットの中でスマホが通知アラームを鳴らした。

音は全員の服から同時に聞こえた。思わず顔を見合わせる。

そして誰からともなく、音がしたポケットの中を探り……

「何だこれ……こんなの入れた覚えはないぞ」

取り出したスマホには、見覚えのないアプリからの通知が来ていた。ほかの奴らもそれぞれのスマホを手を取っている。

「私も知らないわ、こんなアプリ……」

「マジでなにこれ？ しかも、なんか知らないグループに登録されてるしー」
チャット用らしいアプリの画面を開くと、俺たち4人の名前で登録されているグループがあった。

——暮坂照

——三峯あいら

——布良麻奈美

——天願壮吉

アイコンは俺たちの顔写真になっていた。どうやらコンテンツの中にウェブカメラか何かが付いて、いつの間にか隠し撮りされていたらしい。

そして、さっきの自己紹介で聞いた覚えのない名前が一つあった。アイコンは眼鏡坊主の顔写真だ。

「これ天願てんがん壮吉……って。オッサン、あんたでいいの？」

「……だから、俺にもわからないんだって。ただ、この名前で呼んでくれていい。名前がないのは不便だからな」

アプリの仕様なのか、設定はこちらで変更できないようだった。

通常のラインならある、招待や退会のボタンも見当たらない。つまりこのメンバーでずっと固定ってこと？

グループ管理者 「みなさんこんにちは」

グループ管理者 「はじめまして」

グループ管理者 「これからよろしくお願いします」

このチャットグループのグループ管理者と思われる相手からのメッセージバルーンが、すでにチャット画面にはいくつか表示されている。

「誰……？ なんなの一体？」

「よろ言われても、どうすりゃいいのよ」

グループ管理者 「あなたたちは残念ながら死んでしまいました」

グループ管理者 「でも安心してください」

グループ管理者 「ある組織が実施する計測実験の被検対象として、あなたたちは幸運にも選ばれました」

グループ管理者 「つまり、死から蘇生したのです！」

グループ管理者 「おめでとうございます！」

「はあ……？」

「実験……？」

さりげなく死亡を確定されてるし。だいたい『ある組織』ってなんだよ？ 一気に胡散臭い話になったぞ。

それに……

「蘇生って、これどういうこと？」

「これ、うちらがなんかキャンペーン的なアレに当たったってこと？」

若干ピントのズレたことを言ってる奴もいるが、最大の問題は麻奈美の言った部分だ。

蘇生……この文脈で普通に考えると、一度は死んだ俺たちが奇跡的に息を吹き返したっていうような意味になるが。

だが、『幸運』という二文字に俺は寒気を感じた。

だって、そんな旨い話が世の中にあるわけないだろ？　そこで不気味に思えるのが、『実験』という別の言葉だ。

与えられた『幸運』の見返りに、俺たちはなんらかの代価を支払うことになる……

それが、これからの説明で明らかにされるような予感がした。

グループ管理者「あなたたちの死亡事実は既に社会的には残っておりません」

グループ管理者「警察や病院などの公的な記録からも抹消されました」

グループ管理者「ご家族が先に死亡の連絡を受け取っている場合は、その後無事に蘇生し快方に向かったということをお伝えしてあります」

グループ管理者「なので、ご安心ください」

グループ管理者「今夜の作業が終了次第、そのままご帰宅いただいで構いません」

やっぱりな。ほうら、おいでなすった。

『作業』だと？ 俺たちに何をやらせようってんだ？

「こいつ、なに言ってるのかマジでイミフんだけど……これって要はオレオレ？ 詐欺っぽいやつ？」

「ここに書いてあることを信じれば、の話だけど……私たちが死んだことは、無かったことになってるみたい」

「じゃー、検査かなんかが終わったら帰っていいって話？」

それに、これが本当なら『ある組織』ってのは警察やら何やらにも介入できるってことだろ？

なんだよそれ。ハッターリじゃなければ、ちよっとヤバすぎだろ。現実感がないっていうか。

……現実感？

死んだ人間が生き返ったとか言ってる時点で、ツツコミどころはそんなとこじゃないよな……

グループ管理者 「作業について説明いたします」

グループ管理者 「作業開始のタイミングで、皆様の端末が地図アプリに切り替わります」

グループ管理者 「地図上には赤いマーカーで今夜のターゲットが表示されます」

グループ管理者 「皆様は地図情報に従ってターゲットを追跡してもらい」

グループ管理者 「殺害していただきます」

空気が完全に固まっていた。

「……バカじゃねーの？」

俺の感想はその一言に尽きた。

確かマンガで見たぞ。こういうの。殺人ゲームとかそういう系のやつな。

マンガならまあいいわ。退屈しのぎの愉しみのために、わざと面白おかしく作ってある嘘っぱちなんだから。

でもこれ現実だぜ？ いい大人が『殺害していただきます』とか言っちゃって恥ずかしくねーの？

「ああ、確かにバカげてはいるわな……けど、バカやるにしちゃ手が込みすぎてねえか？」

「だってよ、俺たちは現実に生き返ってるんだぜ？ 死んでなかったとしても、相応の重態から完全回復してるわけだ。それは事実じゃないのか。この『ある組織』とやらがそこまでの医療コストを支払って、俺たちにやらせるのがただの冗談や酔狂で済むのかよ？」

坊主眼鏡——天願の言葉は、俺も無意識には感じていたことだった。自分の甘さを暴かれたように、少し悔しい。

グループ管理者「今のみなさんの状態について説明します」

グループ管理者「各自の体内には特殊なバッテリーが内蔵されています」

グループ管理者「バッテリーの電力が、あなたたちの擬似的な生命活動を再現しています」
グループ管理者「電力が切れますと本来の状態に戻ってしまい」

グループ管理者「二度と再起動は不可能になってしまいますのでご注意ください」
陽気な形をしたワードバルーンが表示する文字列に、心臓が不快な軋みをあげた。

他の3人も、無言のまま食い入るように液晶画面を見つめている。
書かれていることの内容は、さっぱり意味がわからない。

でも、ろくでもないことが書かれていることだけは伝わってくるのはなぜなんだろう……
グループ管理者「みなさんの電力の残量は、あと10分で切れます」

「おい待てよ!？」

突然飛び出してきた具体的な数字に、俺は脊髄反射で叫んでしまった。

それと同時に、不穏な文字列が脳内でフラッシュバックする。

『電力』『本来の状態に戻る』『二度と再起動は不可能』

「は!? なになに!？」

グループ管理者「道具はコンテナ内に用意されたものを使用してください」

グループ管理者「ここまでで何か質問は?」

俺は、鬼のような勢いで画面をタップしはじめた。他の奴らも同じことをしている。

暮坂照「電気って俺に何の関係があるんだよ?」

グループ管理者「その説明は作業終了後にいたします」

天願壮吉「殺害とはどういうことだ？」

天願壮吉「俺たちに誰かを殺せというのか？」

グループ管理者「人ではありませんのでご安心ください」

グループ管理者「ターゲットは俗にいう『幽霊』になります」

暮坂照「バカにしてんのかてめえ」

暮坂照「いるわけねーだろそんなもん」

グループ管理者「幽霊は現実に存在するものです」

グループ管理者「具体的に説明すると『情報量を備えた電磁気の塊』になります」

グループ管理者「あちこちにいますが普通の人間には干渉できません」

グループ管理者「みなさんだけが電氣的に視たり触れたりできます」

布良麻奈美「あ……」

布良麻奈美「家族があるので帰宅したいのですが」

グループ管理者「基本自由ですが、10分後にあなたは元の死体に戻ります」

グループ管理者「それでよろしければどうぞ」

三峯あいら「☺」

「アホかッ、こんなときに絵文字とか使ってんじゃねーよ」

緊張感が削がれること甚だしい。

「アホとか言うなし。つか、これどーにもなんないっしょ」

やけに醒めた、というか座った目つきをあらが見せた。

俺や麻奈美のように動揺していない。こいつ、土壇場での度胸は妙に座ってるな。

「とりあえず、どんなもんだかやってみるしかないんじゃない？ 10分って時間がバリ気になるし」

「幽霊とか電波なこと言い出してる相手だぞ？ まともに取り合うのかよ、こんなの？」

「なんで……？ どうしてこんなことに巻き込まれてるの……？ 家に帰りたい……帰らせてよ」

対照的に、麻奈美のほうはもう限界といった様子。

天願は、相変わらず何を考えているのかわからず不気味だ。黙って画面をタップし続けている。

天願壮吉「なぜその幽霊とやらを殺さなきゃならない？」

天願壮吉「納得できる理由を説明しろ」

グループ管理者「自分バイトなんでわかんないっす」

グループ管理者「では作業をスタートします」

「……ッ」

もう少してスマホを壁に叩きつけそうになった。

こいつ、頭イカれてるのか……ふざけてるにも程があるだろ!?

その瞬間、メカニカルな音が突然コンテナ内に響いた。

何かの機械にICカードを通したときみたいな電子音が、ピピッと鳴る。そして、モーターの駆動音がコンテナの壁を震わせはじめた。

コンテナの中に、新鮮な外気が流れ込んでくる。

閉ざされていたコンテナの壁面がワイヤーに引かれ、ゆっくりと外側に向けて倒れこんでいく。

その向こうは夜だった。闇に包まれた倉庫内と思しき場所。

「あッ!」

同時に、グループチャットのアプリが強制終了する。代わって地図アプリが自動的に表示された。

地図上には俺たち4人と思しき黄色のマーカーが映っており、その上にストップウォッチみたいなカウンターが浮かんでいた。

「やっべ!! もうカウント始まってんじゃない!」

00:00:00から、物凄い勢いで目減りしていく数字の列。10分という謎のタイムリミット。

「うそ、画面が元に戻らない……!」

スマホの操作はもう受付不能になっていた。ただ地図アプリと数字のカウントが表示される

だけだ。

外の明かりがコンテナ内に差し込んだことで、隅のほうに『道具』とやらが入った収納ボックスが見えた。

その中身は……

金属バット。

7番アイアンのゴルフクラブ。

ボールのようなもの。

梱包作業用の大型カッターナイフ。

種類はバラバラだが、数は4つ。この場にいる人数分きっちりだ。

「確か、これを持って行って言ってたよな……」

どれも、使いようでは人を殺せそうなものばかりだ。

俺はとりあえず確保する道具を物色する。何かあるかわからない。ここは、一番殺傷力の高いようなものを取っておくべきだろう。

「あたしこれゲート！」

最初に目を付けた金属バットを、あいらに取られた。あわてて、長さで対抗できそうなゴルフクラブを奪う。

天願は鉄製のボールをつかんだ。

麻奈美は呆然とたたずむばかりだったが、情性で残されたカッターナイフを取り上げる。そして、誰からともなくコンテナの外に出る。コンテナが搬入された倉庫の扉は開放されていた。

倉庫のある敷地内を出ると、そこは何の変哲もない夜の住宅地が広がっていた。都内どこか日本のどこにでもある光景だ。

「どこだよ、ここ……」

「とりあえず、外には出れたか……」

一瞬、このまま逃げられるかとも思った。が、例のカウントダウンが頭から離れない。無視するには不気味すぎる。

自然と目の前の道を歩きだした。他の3人もめいめい俺についてくる。

「どっかにGPSでも仕込まれてんのか……?」

俺たちが動くと、地図上のマーカーもそのぶんだけ移動した。

とっさに服のポケットを調べるが、自分の持ち物以外には何もなかった。財布の中身もそのまま残っている。

とりあえずこのまま通りを進むと小さな河川があり、橋が見えるはずだ。

「静かね……」

「なんか、うちの近所っぽい感じ」

俺たちの移動に合わせて、画面内に表示される地図がスクロールしていく。

すると、画面の右斜め上に赤い色のマーカーが出現した。

赤いマーカーは、ゆっくりとした速度で南東へ移動している。

「あっ、これなに？」

「例の……俺たちのターゲットとやらか？」

「とりま、そっちに行ってみようぜ」

「私は嫌よ……だって、殺すとか殺さないとかいう話なんでしょ？　あなたたち、もしかしてもうそのつもりでいるっていうの？」

信じられないというように、麻奈美が異議を唱える。

だが、俺からしたら信じられないのはそのためらいのほうだ。だって、このまま何もしなかつたら死ぬかもしれないんだぜ？

「いや、そこまでは考えてないよ。もしかしたらTVのドッキリかもしれないじゃん？　とりあえず行ってみればわかるって」

麻奈美への侮蔑を顔には一切出さず、わざと軽くそう言ってみせる。麻奈美の表情がとりあえず納得の色を浮かべた。

「そうね……それだったら安心できるんだけど」

「あっ、なるほどね。おまえ頭いいじゃん」

あいらもついでに納得する。

けど。それは確信があるというよりも、願望で口にした言葉にすぎなかった。瑛太先輩に仕掛けられたばかりという影響もある。

本当だよ、麻奈美さん。マジでドッキリだったら、どんなにいいか……

けど……

もしそうじゃなかった場合、俺はどうする——どうなるんだ？

これ以上、そのことについて考えなくなかった。頭を空にして足だけを黙々と動かす。

夜間の住宅地だけあって、屋外を歩く人間の姿は見えない。

だが窓に明かりがついている家もあり、人の営みがそこに存在していることを感じさせる。

そこには日常が間違いなくあるのだ。だが俺たち4人だけが、それを目にしながら素通りしなくちゃならない状況。

放課後からずっと、悪い夢の続きを見ている気分だった。

そんな現実逃避気味な俺の前に……やがて、住宅地の通りを歩く後ろ姿が肉眼で見えてきた。液晶画面に映る地図アプリの中でも、黄色と赤のマーカーはどんどん距離を縮めていく。

嫌な感じに動悸が速まってくる。

自然と早足になっていた。他の3人も同じ。

前方に見える背中がどんどん近づいてくる。

もうはつきり見える距離だ。スーツを着た男の会社員風。後ろ姿だけど、年齢はまだ二十代ぐらいで若そうだったというのがわかる。

距離は10メートルを切っているだろう。ちょっとした横断歩道を挟んだ向かい側ぐらいだ。改めてスマホの画面を確認する。

赤いマーカーは、俺たちを示す黄色のマーカー3つとほとんど重なっている。あの男以外に該当する歩行者もいない。

つまり、タ・ー・ゲ・ットはコイツで間違いないわけだ。
で、どうする……？

身体の内側から殴りつけてくるような、心臓のでかい鼓動。その刺激と沈黙に耐えきれなくなり、俺は口を開きかけた。

「すみません」

まったく同じタイミング。俺の隣にいた天願が、歩行者の背中に声をかけていた。先を歩いていたスーツの男が足を止める。

そして、ゆっくりとこちらを振り返った。緊張で思わず呼吸が早まるのを感じる。

「——はい？」

その顔や声は、あまりにも普通だった。幽霊でもなんでもない。俺たちと同じ、普通の人間だ。

安堵で止めていた息を吐き出す。これは違うと思った。

ここは適当にやり過ぎそう。それから、他の場所で赤いマーカーが動いてないか調べても遅くない。

「あ、ええと——」

男に数歩近づく。

その瞬間。

通り雨に似たザアツという、昔あったTV画面の砂嵐ノイズみたいな音が鳴った。

その音は、目の前の男から聞こえた。

映りの悪いブラウン管みたいに、渦巻状に輪郭がぐにやぐにやに歪んでる男から。

「アイイイッ!」

なんだこれ!?

なんだこれ!?

マジわけわっかんね!?

マジわけわっかんね!?

「なにになになにに!」

あいらの叫びで、バグった思考ループが元に戻る。純粹な驚きが、意味不明の恐怖へと塗り変わっていく。



「なんだよ!? なんなんだよオオツ!!」

「なんですかあ?」

苛立ったような声を漏らし、会社員風の男のほうからもこちらに近づいてくる。

また距離が縮まったせいで、男の姿が一瞬ぐにやっとう変型した。

確かに顔だけが10倍ぐらい巨大に膨らみ、魚眼レンズを通したみたいに歪んだのが見える。

「ヴエエエエツ!? ヴオああアアアツ!」

麻奈美がひっくり返る音が、横で聞こえた。

ドラマのキヤーみたいな可愛い悲鳴じゃなく、濁った汚いガチな絶叫を喉から絞り出している。

無理もない。さつきは俺自身も、よく心臓が止まらなかったなと思うぐらいビックリさせられたし。

「おおうっ——」

怯んだ天願が、反射的に後ろに飛び退る。そこ

で棒立ちになっていた俺とぶつかった。

その拍子に、お互いの手に持ったゴルフクラブとボールもまたぶつかり合う。ガチンという硬い金属音が、暗闇に響いた。

「……わっ」

その金属音で初めて、俺たちが手に手に物騒な凶器を持っていることに気がついたようだ。男の顔に困惑と恐怖が浮かぶ。そして、意外なほど素早い動きで背中を向けて逃げ出した。通り魔か強盗だとも思ったんだらうか？

夜道でバットやらボールやらを持った集団に出くわしたのだから、そりゃ当たり前前の反応なのかもしれないが……

いや、おまえだつてわけわかんねーグニャグニャ人間だよな？

なのになんて、そんな当たり前前の人間みたいな反応してんだよ？

「逃げたッ——」

さっきのように、あいらの叫びで我に返る。

その瞬間、身体が勝手に動いていた。

走り出したのは、誰が一番先だったんだらうか。

今となってはもうわからないが、とにかく気づいたら俺は男の背中を追いかけていた。他の3人と、まるで競い合うように。

なんて追いかけてるのかと言われたら……それは、相手が逃げていくからとしか言いようがなかった。

この行動に意味なんてたぶんない。誰も理性で考えては動いてない。

今、この身体を衝き動かすのは……

もう一度、あそこに戻るの嫌だ——たぶん、ただそれだけの感情だけだったのかもしれない。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ……！」

走る。走る。走る。走る。

完全に息が上がった。足首と膝がぶっ壊れそう。脇腹がマジでちぎれそうに痛え。向かい風で目の水分が乾ききってヒリヒリする。

気持ち悪い、吐きそう……と思った矢先に酸っぱい液が喉をこみ上げてきて、口から逆流した。

ちくしょう……足、速すぎだろコイツ。そんだけ必死なんだろうけど。

前方を走る男の背中が、追いつきそうで追いつかない。

次第に、俺の中にその背中に対する憎しみにも似た感情が湧き上がってきた。

限界を超えた運動で思考能力は白濁し、なにかゲームでもやっているような感覚になる。

当たるかな？ 届くかな？ 右手に握った7番アイアンの長さ、前を走る背中までの空間

距離を目で測る。

凄く自然で真剣だった。今ここでやらなくちゃいけないこととして。むしろ俺の人生の目的は今それしかなかった。

「うおらアアッ——」

思いきって振りかぶり、ゴルフクラブを振り下ろした。

ジャストミート！　って言いたくなる強烈な手応え。

「ぐ、えっ」

走る男の背中から力が抜け、ぐらりと崩れる。

アイアンがめり込んだ後頭部から出血してらしく、うなじを伝って赤い血が流れた。

血……って。コイツ、やっぱり人間なのかよ!?

今の手応えは、本当に生身の人間を叩いたものと変わりがなかった。男はもう走れず、後頭部を抑えてうずくまっている。

3人が俺たちに追いついてきた。息を荒げながら、常夜灯が照らす路上に散った男の血液を見下ろしている。

全員でうずくまった男を囲む。

誰もが無言だった。うーうー呻く男の声だけがその中で響く。やっちまった感が強烈にあった。

やっぱり幽霊ってのはフカシで、本当はただの人間を殺させようとしたんじゃないか？ あのグニャグニャは信じられないけど見間違いで……

だとすれば、このままやり切るか手を止めるかの二択だ。

ただここでやめた場合、唯一手を汚した俺だけが不利になる。その流れはなんとしても避けたかった。

「とりあえず共同作業なんだからさ。各自一発ずつ入れとけば？」

「や、無理っしょ……」

「必要あるのか……？」

やべー。こいつらもう冷静さを取り戻しちまってる。

麻奈美に至っては言うまでもない。カッターナイフを握りしめたまま、近寄りもせず棒立ちになっていた。

「……いや、だって、こいつ人間じゃないんだぜ？」

なんか俺だけが損したような気分で納得いかない。後で何かあったときに、責任を等分に分散できるようにしとかなきゃ。

「さっきのグニャグニャ見ただろ？ 殺さなくても、とりあえず一発分はやっとけよ。後でおま、えらサボってたってチクるぞ？」

必死に3人を脅していると……

恐怖と嫌悪感の叫びを上げ、あいらが金属バットを振り下ろしていた。

男の顔面が、生々しい響きを立てて大きくへこんだ。噴き上がった血しぶきが派手に飛び散る。

だがその血もやはり、灰色のノイズと化して一瞬で消える。まるで幻だったかのように。

「う……うッ」

吸い込まれるように天願も動いた。

ボールの尖った先端が、脳天にモロクソ突き刺さる。

えぐられた肉の赤身と、髪の毛ごとペロンとめくれた皮膚の下で頭蓋骨の白さがはつきりと見えた。

しかし、その傷口もすぐに砂のような残像を残して消滅する。

そしてそれでも、男はまだ生きて——そう言っているのかわからないが、昆虫みたいに動いていた。

これだけ頭をぶっ叩いても、だめなのか？ ならもっと完全に、確実に殺さないと……鈍器じゃなくて、刃物で刺すとか。

ふと嫌な予感が出て、スマホの画面に目をやる。

「やべ……ッ」

カウントダウンの数字が、既に残り20秒を切っていた。

「カッター！ 喉笛かつ切って！ 頸動脈！」

残された時間で確実に殺し尽くすには、もはやそれしかないように思えた。

「む……無理……ッ」

だがカッターナイフを持つ麻奈美は、ただ蒼白な顔色で首を横に振る。

やっぱ鈍器よりも、刃物のほうが使うハードルが高いか……いや、この際そういう問題じゃないだろ！

「やらなきゃ死ぬんだよ！」

俺は初めて、意識から遠ざけていたその言葉を口にしていった。

そう——俺たちにとつての、この果てしなく無意味に思える行為の意味を。

「無理だつてばあ!？」

だが麻奈美は動かない。ヒステリックに叫ぶと、カッターナイフをアスファルトに投げ捨て拒絶した。

俺はノータイムでそれに飛びつくと、うずくまる男の髪の毛を引っつかんで顔を上げさせた。その顔はまるでシュールなポップアートだ。ほとんどの部分がモザイク状に崩れて消えた空白になっている。風邪ひいて熱出たときに見る夢っぽい。

カチカチと幅広の刃を送り出して長く伸ばす。

男の首筋に思いきり切っ先を突き刺した。そのまま深く薄い刃を押し込む。



生肉をえぐる弾力が手に指に伝わってくる。
俺はその嫌な感触を無視して、めちゃくちゃに
手元をかき混ぜた。

顔のない男の頸動脈がぶちぎれ、噴水みた
いに鮮血が飛び出した。熱くて生臭いその感触
が、モロに俺の顔を直撃する。

「死ねよッ……死んでくれよオオッ!!」
萎えそうな気持ちをも、独善的な叫びで必死に
鼓舞する。

「うわああアアッ、死ねえええッ!!」
あいらも横から、金属バットで男の全身を滅
多打ちに叩いていた。

やがて……

「あ……ああ……ッ。見ろ、消えるぞ……!!」
不定形の灰色をしたモザイク状の残像。もは
やそれだけの形になった男の残骸が、風に吹き
流される砂のように欠けていき……

やがて、完全に消え失せた。

「……あっ!？」

虚脱する間もなく、俺は思い出したカウントダウンをチェックする。

液晶画面に表示された数字は、10分をすでにオーバーしていた。だが時間がマイナスになっても、カウンターはまだ回り続けている。

にもかかわらず、俺の身体に異常は感じない。心臓も変わらず鼓動を打ち続けている。

とりあえずは、これで……

「終わった……の……?」

「だな……」

「やべー……なんか、めっちゃ後味悪いんですけど。爽快感ゼロだし、全然ヒーローっぽくないしー」

確かに……映画とかのバケモノ退治って普通もつとスタイリッシュだよな。

パワーアップできるアイテムとか、凄いいテク武器とか使ったり。金属バットにカッターナイフって、泥臭すぎるだろ。

でもそんなことを考える余裕が出てきたぐらい、今は安心できてることか。終わったんだ、マジに。

同時に、むっとする血の臭いが鼻先にふと蘇ってくる。

血そのものは男の身体同様にノイズ化して消滅したけど、人体を破壊する感触や血の生臭さは本物と同じだった。

猛烈な吐き気がこみ上げてきて、俺はたまらずその場で吐いた。

常夜灯の光を外れた、暗がりのアスファルトに飛び散る俺の胃液。それは男の血のように消えず、いつまでもその場に残っていた。

「やっべ……すげー疲れた……」

そのときになって初めて、俺は全身を襲う凄まじい倦怠感に気づいていた。立ってすらいられず、その場にへたりこんでしまう。

他の3人も同じ様子だった。何か妙だなと直感する。

確かに全力疾走の追いかっこはハードだったし、その後の「殺し」でもスタミナを使ったのはまあ確かだ。

しかし、こんなにも疲れることって普通あるだろうか？

いや、疲れるという表現ともまた違う……単なる疲労なら休めば回復するだろうに、さっきから一向に体力が戻ってくる気配がない。

使えばなしで減りっぱなし。たとえば、そう……
「バ・ッ・テ・リ……」

まるで、自分の身体自体が電池駆動式にでもなってしまったかのようにだ。

そのとき、また例のスマホにメッセージの着信があった。

液晶画面は、いつの間にか地図アプリモードからグループチャットアプリに切り替わっていた。

グループ管理者「作業終了です！おめでとございます！」

グループ管理者「ちなみに10分のタイムリミットは最初からございませんでした」

グループ管理者「制限時間があるように見せないと初回はなかなか動いてくださらないので」

グループ管理者「どうかあしからず」

やっぱり、あのカウントはフェイクだったのか……

だが騙されたとわかって、怒る気力さえ今はない。

だからなのか、『初回は』という記述から感じるはずの絶望感もどこか薄かった。

グループ管理者「みなさんはこの要領で今後も作業を継続していただきます」

グループ管理者「もちろん作業には報酬という形で代価をお支払いいたします」

グループ管理者「報酬は電力の充電で支給いたします。充電Ⅱ延命とお考えください」

電力……そう言えばさっき、作業が終わったら説明するとか言ってたな。

グループ管理者「それでは初回報酬分の充電を開始いたします」

グループ管理者「充電は支給された端末から各自の専用受信端子へのマイクロ波送電により

行われます」

グループ管理者「残量の確認は端末画面に表示されるバッテリーインジケータで行ってください」

「……あつツ？」

いきなり、左の前腕部の裏側に熱を感じた。

腕を裏返してみる。そこに、いつの間にか小さな四角いタトゥーのようなものがあつた。それがLEDランプみたいに淡く光って点滅している。

いや、よく見るとタトゥーじゃない。皮膚に直接プリントされたQRコードみたいな何か……これが受信端子ってやつか？

その受信端子を通して、急速に身体に入ってくるものがあつた。

それは、さっきの運動で使い果たした体力そのものだった。

いくら休息しても戻ってこなかったものが、今ぐんぐんと外側から注入されてきている。

「これ……この%表示って、まさか……」

スマホの画面に、何かの残量を示すバーが表示されていた。そう、まるでバッテリーの残量表示のような。

10%を切っていたそのバーが、みるみる100%の側へ上昇していく。その変動のタイミングは、QRコードの点滅と同期していた。

このバーが、俺自身の命の『残量』ってことなのか……

他の3人を見ると、思い思いの身体部分を気にしている様子。どうやら人によって受信端子の位置は違うようだが、起きている事態は俺と同じか。

信じられないが……俺は今、『充電』されているんだ。

しおれていた活力がぐんぐんみなぎってくる。栄養ドリンクとかじゃなく、電気によって。はは……なんなんだよこれ。もう笑うしかねーわ。

グループ管理者「バッテリーはフルの状態で約1週間から10日程もちます」

グループ管理者「ですが様々な肉体的条件によって変動しますのでご注意ください」

グループ管理者「激しい運動や摂取カロリー不足はその分だけ電力を消費してしまいます」

グループ管理者「ので」

グループ管理者「待機期間中はなるべく規則正しい健康な生活をお送りください」

グループ管理者「次回の作業日時と集合場所はこちらから連絡します」

グループ管理者「ので」

グループ管理者「是非ご参加ください」

グループ管理者「もちろん拒否も自由です」

グループ管理者「ただしその場合は報酬も発生しません」

グループ管理者「本日はお疲れ様でした」

グループ管理者「お気をつけてご帰宅ください」

発言はそこで途絶えた。

誰もが無言だった。今の俺と同じ気持ちなんだろうか。

誰とも知らないヤツらの呼び出し一つで集められて、こんなことを無期限ですつとやらされる？

しかも、やめたらそこで死ぬしかないってことだよな？ それも充電が切れるまでジワジワと。

ブラックってレベルじゃねーぞ。そんな労働環境……

「つか……俺って、やっぱり死んでたんだ」

衝撃の事実なんだろうけど、知ってたって感じた。

今さら驚くには一晩で異常なことを経験しすぎたし、文句言うにも誰に言ったらいいのかわかんねー。

何より、これからのことのほうが大事だし気が重い。

マジに絶望したとき、人間って意外と怒りも悲しみもしないもんなんだな。なんつーか、感情自体がゼロになっちゃうっていうか。

ただ……

「おいおい……どーいうことなんだよ、俺……」

ちんこが痛くなるほど、パンパンに勃起していた。

この悲壮な空気を全然読んでねーぞ。こら下半身。

せめて悲劇のヒーローっぽい気分になろうと思ったのに、これじゃ台無しじゃねーか。とんだバカ息子め……

いわゆる疲れマラってやつなんだろう？ とにかく無性にムラムラする。禁欲生活を半年ぐらい続けたような気分だ。

ズボンの上からでもはつきりと形がわかるほど、テントが張ってしまっている。今めっちゃ女とセックスしたい。俺のザーメンで思いきり孕ませたい。

相手はぶっちゃけ、誰でもいい。まんこさえ付いてれば……

「やっべ、なにこれ……」

「はあ、はあ、はあ……」

……いたじゃん、まんこ。

ちなみに女たちの様子も、明らかにおかしかった。

ふたりとも頬が紅潮し、目は潤み小鼻がふくらんでいる。呼吸が異常なほど荒く……そしてエロい感じに汗をかいている。

やっべ……やりてええ。あいらと麻奈美を二人まとめて、今すぐに。

「なんか、身体おかししいし……」

「苦しい……は、ああ……っ」

二人の太ももの内側が、小便でも漏らしたようにグッシヨリ濡れていた。けど、あれは尿じゃない。異常なまでに発情した二人が分泌してる愛液だ。

ふらふらと、まるで映画のゾンビみたいに頼りない足取りで俺と天願のほうへ近づいてくる。「……おい、どうしたんだよ?」

天願は妙に冷静だった。

「もう我慢できないの……っ、苦しくて死にそうよ……っ」

「早く、ここに突っ込まないとマジ死ぬって……!」

麻奈美が悲痛な声を上げた。あいらも切なそうな目で俺をじっと見つめている。

ああ、わかっている。俺もまったく同じ気分だからな。

一秒でも早く、ちんこをまんこをゴシゴシしたいんだよな? マジで、そうしないと息が詰まって死にそうな気分になってくるんだよな?

言ってみりゃ、これは命を守るための緊急避難みたいなもんだ。なら……

「じゃあもう、ここで始めちゃっていいよな……?」

「おい、おまえまで何を言ってる——うおッ!」

天願の言葉が途中で遮られる。のしかかってきた女二人から、俺と一緒に路上へと押し倒されたのだ。

星空が見えた。人が寝静まった真夜中とはいえ、住宅地のど真ん中だ。もし人が通れば、ば

っちり何から何まで見られちまうだろう。

けど、そんなもん構いやしない。俺の頭は今、完全に性欲100%で支配されていた。

そして二人の女も、俺と同様……いやそれ以上にそんな感じだ。目つきも息づかいも、どっちの女も発情したメスそのものになっている。

真夜中の路上で、衣ずれの音かきしげに響いていった。



**DEAD
DAYS**
2019.6.28

DEAD DAYS — first day —

謎の存在に強制的に蘇生され、「生き続けたければ“亡霊”を狩れ」と指示された男女数名。彼らの死は隠蔽されており、何事もなかったかのような日常に戻っていく。だが、その後も前触れなく召集されては“亡霊”狩りに駆り出され、更に“甦りの副作用”であるという激しい性衝動に苦しめられる日々が続く。誰が、何故、何のためにやっていることなのか。自分たちは元の日常に戻れるのか——若者たちの先の見えない苦難の日常を『Maggot baits』『眠れぬ羊と孤独な狼』の昏式龍也が描く、生と死を問うサスペンスアクション。序盤シナリオを収録した試し読み小冊子。

企画・脚本 | 昏式龍也
キャラクターデザイン・原画 | のりざね
シナリオ | 昏式龍也・小沢裕樹
監督 | 阿久津亮

●製品情報

タイトル：DEAD DAYS (デッド デイズ) ジャンル名：生と死の境界線で戦う日常 ADV

対応 OS：Windows 7/8/8.1/10 公式サイト：<http://clockup.net>

2019年6月28日発売予定

※本冊子のシナリオは冊子収録用のものであり、製品版とは異なる場合があります。
※この物語はフィクションであり、実在の団体・地名・企業とは一切関係はございません。
※18歳未満の方はご購入になれません。 ※本製品は日本国内専用です。

©CLOCKUP **ADULT ONLY** **NOT FOR SALE**

生きて、死んで、生きる。